



新
九
三
五
七





晉其角序



能諧乃集つる事古今り
やうらゝは道れおまて起通
き時たれや幻術の事一也
しそろれ白り魂る入さ道
くゆ免よ極めさるに似る
海一久しそ世よそまら
もく人ようわてあふ及た家



を志しじ五徳いりしよ及ん
ゆらさをいじゆ画さい多しな
こたり彼ぬり上人の骨り
てんを作しししし輝いれ
ゆる笛を吹やうになん結る
とりされなる人よ成て清蓮
ゆるを五の輝のしりれさぬは
及魂乃法れをらうこうよ結ふ

辰は道ししたありるれ入る
しアイウエフよくひきき
いしりしん吟輝いよあぬ過
しし能諧よ魂れ入しし輝
よころとて我翁行脚乃しよ
字加哉ししちよ山中しし
猿し小養をと着せし能諧
乃神をへぬちしん今れをた

らまら新賜のむらゝを呼
しむ神ありに懼る人まの
術なりこれとえうしは
集をつらしと懐このし名
付しはまらるる是の序を
べらるる魂を合せし去来
元兆乃はしちたのよまら
書

猿蓑集卷之二

冬

初一と我猿を小蓑をほし也 道蓑
あまけりを時ある夜其時
時多しやまらるる 其角
幾人か一と我らぬか 千那
徳持のね振らるる 文州
度はゆるり時ある 正秀
史邦

舟人のあはれきりしつゝし 尚白

伊賀の境より

やうきや奈良の隣乃一時雨 曾良

つゝしや早本つじ屋の窓あり 元北

つゝし竹田の里やけしつゝ 乙羽

ふもきけし早あまや小夜つゝ 羽紅

新田は稗穀屋つゝしつゝ 昌房

つゝしや沖の河をけし帆片帆 去来

つゝしおとよ北平代早あま 百歳

つゝしおとよ地をきしおとよ 野水

流して

つゝしおとよおとよ船の中 其角

歸りおとよおとよおとよ 同

禪もけしおとよおとよ 元北

百舌もあまおとよおとよ 嵐蘭

おとよおとよおとよおとよ 芭蕉

かよけ金延ぎれさのをよき 凡兆

よのよ

揮舞のこころ外も杜ゆれ 伊賀 土井方

流帰をやうめて通る十絶外 膳所 裾道

らやのさねやいさくあさ呉屋女 伊賀 越人

さしゆは茶あふゆよ折しり 伊賀 猿錐

百ちの賀子も垂りてをり 伊賀 凡兆

公羽の雲甲ふ雲衣をよき

難水のおとらげうい冬こもり 伊賀 其角

ころきと牡丹のさねも裸 伊賀 車来

草津

あはるさゆいさゆい 伊賀 尚白

神逆水にさくらうさゆ 伊賀 珍碩

霜月朔旦

信まらふよ物あり 伊賀 良品

水き月れあを折るや水仙 羽後田 不王

今ハ世ニハシラシクシテハ冬ノ蜂 尾張 且葉

尾野のころもあまの海原即 去来

一、後くしきも海や釣干菜 伊賀 探丸

しらしに又か賀村宮井のき 口戸 尚白

茶湯のころも目も極 龜翁

炭竈より負れ杖の倒き 凡兆

住つめ娘のころや赤火燧 芭蕉

寝ころや火燧浦園のころ 其角

門前小室形もあろぬ冬を 凡兆

木龜也切も 尾張 茨境

ころも眼も 伊賀 半殘

貧交

まらりそ 文州 孤子れ切を譲り

浦風や巴を 曾良 衡

あし儀や 去来 衡

狼のめと踏消す 史邦 や濱千鳥

背門は乃入はよのほろふをあら 丈艸
いり道々雪よまうふきて鳴子雪 千那
矢田のおや浦のあられよ鳴ふる 允兆
筏とれくふる跡や鷺の舟 本節
水魚をうらうて其魚の小鴨舟 丈艸
るらんも寢入るわら余吾の海 路通
死まうて操ぬらん鷹はんか 貝葉
襟をさうり首引入る冬れ月 秋風

天木戸や鎖のまわれて冬れ月 其角
かゝ志りた蒲團くらりやみみの隈 長崎 暮舟
又やうきん旅人ふじ 石部山 大津尼 智月
翁は御れおのき衾をとあま 義濃
らる記あり略々 竹戸
首をうらうつ雪をんくやけ衾

題竹戸之衾

五とりの我まれあゝそ紙衾 曾良
魚のうけ糶乃やうてがとさ秋舟 探丸

志のこゝに教珠の如く守綱代書 史邦

清白砂の候す

膝つゞきよかきとまらりまほる霰の 史邦

校樹の葉ふら敷よ狂ふありけり 野童

鶺鴒乃鶴よりりこほす霰教の 不蜂

呼くよ射賣つんえぬあられけり 凡兆

こころれ渾きまらや朝飯の世あはれ 畫好

しつちち内よ居たりれ人の得 其角

初雪の雪部屋のうらね朝 史邦

ちねたひのよは吹くやちちち 羽紅

つらまのひるんねねのこつちまらけ 探丸

下京ちちつじよほん夜れる 凡兆

ちちちとに一ちちちちちの原 同

信濃路をさるる

ちちちち植屋に居りけり 芭蕉

草之庵の留りけり

養老の公屋もあけの巻れを
其角
尾張
五月の竹の子巻うはらりる
羽笠
長崎
海よも健あつらふる結しん
卯七
いんらつこちやきつめつ
去来

青亜追悼

乳のこもに世を渡りし師長
尚白
うも魁もえ也の度とをた内
芭蕉
餅くじ懐の影も似ぬとめ
乙卯

一月のあま来りてしらしよ
又州

住吉奉納

夜神系や鼻息白一面の内
其角
節季候よ又のこしき事しれ
伴賀
須玖
あつらひらひらしよ
同
祐甫

乙卯、新宅として

くの家をこころせし其年忘
芭蕉
弱法師の家門ゆるせ餅のれ
其角

歳の後や曾祖父をゆげふ手枕 長和
 うす望れしこゝろやうーの者 去来
 らまてゆ事娘まへにや伊勢の 同
 大とーやまはまを結ぶくまら 羽紅
 やりくねく又やうーくん義の層 其角
 い縁もくよいーつ年れ暮 路通
 季のく我破も袴は幾くあり 松風

猿蓑集巻之二

夏

有明の面みそすやーいー 其角
 夏すすこ思ふ心ち燕や時鳥 其角
 おもも様よーいーいーいー 芭蕉
 時鳥くーいーいーいーいー 尚白
 けいけい何もなまおーいー 凡兆
 りん道もさのーいーいー 智月

蜀魂 ちやくや本の角櫓 史邦

入おれしきの中や 羽紅

ほろに流るりか 文州

んちも代官 去来

こし死に我塚 遊女 奥刃

松崎一見の所 松崎一見の所 曾良

去鴻や 去鴻や 芭蕉

うも うも

旅館庭 色草をとえす

月桐葉 膳所 曲水

四月八日 請慈母墓

あは 其角

系 江戸 全峯

別僧

らし 十三年 越人

か 珠碩

霜は依らねてすまゝありし
しりし

似合しすけいのうきあひの里 亡人 杜國

あふささるうけのま 嵐蘭

井はすゑしゆく清く 杜の里 本錢

起すくゆはまもつれぬ
朝の雨乃

起くのこころはかよつゝ 仙化

題去来之岨峨洛柿舎る

巨椀の如く木魚屋を名はす 元兆

破垣やわらば麻子たがひ道 曾良

南都旅店

誰のこころにたのむ乃園北桐 千那

洗濯やまあよもこ 込柿の末 尾張 薄芝

豊國よて

竹の子れ力を得る多しよへき 元兆

ふけのち子や白濁り 懸念 去来

たげのこや推すぬの得たもい 芭蕉

猪之吹入さうさうしれ 正秀

明石夜泊

晴まやしめよ音城友共月 芭蕉

君が沈む地摩奈を鍋一ツ 越人

五月三日
しんがうーしんがう

包Q音目と並くしける高蒲也 其角

粽はふかきふかきむ額髪 芭蕉

隈篠の廣きふさうし 餅粽 岩翁

さしきたに客人やとふまうりや 尚白

五月六日大坂より死の
遠志を市に

大坂や刀をぬき夏乃み十夜 蝉吟

伴質

真筋を館まで

其草や兵九つ油丸乃跡 芭蕉

這出よわい屋の下此蟻の跡 同

け境いひしうきうきうきうき
の事一書

かきうの角かりしげは決定的石 同

五月ぬよ家あり控てありし
凡兆

ひね妻の味もさやありし
木節

るさの謂次ありしと雨
史邦

奥羽名取の郡よ入く申ゆまの
の塚ハソくくやとるはし
道より一里さるりたり乃方
並始といふまよるとまゆ
わりつゝまよる五つ毎に
わくまよる

道始やいつこみよけぬり道
芭蕉

大和紀傳のさしこくありて
て作其の形れをこくして

すめたるハ料はつゝ
紙のこくに書つり作る

つくりもくありて
去来

髪剃や一夜今情のみり
凡兆

日の道や葵似くさ月あか
芭蕉

道油や若もせし
羽紅

七十余の老醫みまうりり
かよんころりてな
にいふの白をけり
いさうりり
る人よあつちち
めし

けしき年よこころといふことか
ゆきさうりりきし

六尺も力やとくや五月あか 其角

百姓も麦よ取つく茶摘可 去来

まじりてや茶山よはまぬつれ 正秀

つみ合ふるけりや麦白田 游力

孫と愛し

妻共余の家しとやらん雨蛙 智月

まはれきて鯉道喰よ山やぬか 花紅

あつ川の関とて

月流のくもや奥の田挿し 道蕉

出羽のうたなること

冒掃をて面新しとね粉のふ 同

法隆寺用帳
南無佛のたきを拜す

清袴のくもやうくね粉のふ 千那

田の臥たをうくね粉のふ 伊賀 万手

膳所曲水之樓とて

螢火也吹と八はもらうし鳩のやと 去来

塙田乃曇つん二句

闇の夜や子を泣かすと曇つて 九兆

いしつらんや船頭酔て其はつれ 芭蕉

三熱野へ清きもの時

螢火やうらうらうらうら八鬼尾谷 長崎 田上尼

あれらうは糖とてりあふぬ 尚白

草むしや百合の中こころの魚 半残

病後

やうらやのうらうらうら 大坂 百合のふ 何処

すし月や家よりせんよ百合の花 乙卯

蟻蚊癖を伝へて

子やなん其子の母を蚊の咬む 嵐蘭

餞別

ちとすや蚊屋もいづか蚊の香 膳所 里東

うらうら 系宮 下は看とていしつれ

芥子之夜と昔の冠者よみかた 其角

清風や雲のまきり耳乃穴 文州

下等や比中^{膳所}のくさ蝉の糸 嵐雪

客よりや舟をひける鯨の筋 探志

ゆく死のうらまゝらんす野の糸 芭蕉

表さや音麻州とあめのは ^{伴賀} 槐市

流りぬく深の糸のうら流哉 元兆

舟のまゝの唱^舟の合歡の花 于那

白雨や鏡よりよも日れ夕 史邦

素堂之蓮池邊

白るや蓮一枚の捨りつゝま 嵐蘭

月鏡田や時くつゝく鳴く蛙 乙卯

日乃暑と鹽の底の蟻^{ウニカ}くれ 元兆

水を月も鼻つとあつと殺^殺を金 同

日の曇やこりぬく暑と牛村台 正秀

寺々暑く蘇^蘇よれ髪^髪の露 本節

志りんゝの鞍ゆゑにうあし

野童

のうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

羽紅

青草の湯入おらんあいら

巴山は

千子のあまのりりりりりり

さしゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆらゝゝ

まゝゝゝの小袖を今や青南千

芭蕉

水を日や朝うゝらあゝゝゝ

嵐蘭

志ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

宗次

すゝゝゝは平朝うゝゝゝゝ

元飛

辰ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

千那

月録や見乃家純馬牝

曾良

夕ゝゝゝゝや岨並ゝゝゝゝ

去来

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

諸ゝゝゝゝ

やゝゝゝゝの今乃比敷ゝゝゝ

大坂之道

猿蓑集卷之三

妹

梅もや蓮もさくさくよ花一つ

不知
讀人

此句東氏よりきこゆ

素堂の

かひくちのめけおの齒や秋の風 秋風

芭蕉居少を何よおれや妹の風 路通

人よ似く梅もよと細袂のさ 珠碩

加賀乃全昌寺に宿す

七

終夜枯れきくやまのふ 曾良

かす原や路馬の寝ぬおを輝の風 山川

あまのやみや鬱合を留れ枯れけ 凡北

くし露や積の所芝の起あふり 去来

大比叡やくくぬおの葉のてぬき 野童

と葉らりて跡とあねまや桐の苗 凡北

文目や六りもなみの夜よ似す 芭蕉

合歡のよれをさういふと合あけ 同

伊賀小舟

七夕やあふりいづくはくろぬへし 杜若

こやこよの位よりさたり相撲取 去来

伊賀

朝のぼる露の眠るあつらわぬ 風姿

膳所

は舞やあふこの昔受てけりし 及肩

笑もの泣かそよとほま権りし 嵐蘭

ま我無くけりてるし木槿か 秋風

ふり花を流しそたけりし 千那

後二

七

まよひの如く歩めある事や殊巖雨 史邦

そよよや穀の田より卯あじ 豊稔

秋風やよりのこぼるるくさす 子尹

迷い子の親めころやすさ東 羽紅

まよひの文をけり序のまよ 凡北

まよひの文をけり序のまよ
つらつらおせにふて
思ふまよひのまよ 去来

草刈より花の回りの三秋の小路 李由

え禄二年公卿は休せしめて
こらのくさりの三越後まかり
り軒しつるかの園をて
いりりゆりていせまてえ
をたらまて

いつくよつたよれ跡も秋の東 曾良

桐の本にうらなひの堀の内 色蕉

百舌鳥あやむ日さ 凡北

初序より花のまよ 落梧

表

亡人

蛸田より

病馬の跡とじよあて跡の
芭蕉

海老の足と海老よりの
同

加賀の小屋のこまをカタ田乃
神社の宝物として之を
うらむ草乃乃よりの同
錦のふれもをさし斗な
くまのあつり跡よりの同

むんや甲のよれきりくす
芭蕉

葉田村二のふれ申の虫は
尚白

つらつらや蟹よきつ夜は月よ
風琴

いさよまのつらつら

葉月やた鶴よ海人さかん
千人

こころ月に蝸のあつり
之道

粟稗も同本處あり
半残

月とせん休見の跡乃
去来

翁を茅舎よ布して

伊賀

つらつら松笠よりの
土井方

葉

叶

加茂よ詣きては涙の跡を

かのよくの

あつこのもーうの非はよ
あつこのもーうの非はよ

月影や指すもろく膝の上 史邦

友近の六條よかろりつり

ろりつりつりつり

伊賀

影やりたつてんは朝日夜 卓袋

しそはなやあそくし日の影 乙羽

京筑紫を身すれ月ら信申者 丈州

明けの相もやうよ月一り 元兆

ぬりひていしはあらぬ月の面 尚白

向の籠るやちの月んる 曾良

え禄二年つるは儀

月をさくして氣比の相

つはちとくの例

月清く照ちのしる 芭蕉

仲姪の初至猶子を送

うさ夜の月もるはらねと道 云来

膳所

明月ややちと寺は茶はあそく 昌房

月ツキのヨるる人の跡あとはならず　　羽ハ紀キ
 僧ソウ正テイのいままのふ屋やはならず　　尚ナカ白ハク
 和ワ潮シウや鳴つの浪なみの飛舟ふねはならず　　凡マン兆テウ
 一イツ戸コや衣もやらず　　去キョ東トウ
 釋シヤクの輪はならず　　越エツ人ジン
 流リウ糟ソウやわらず　　食シキ子コはならず　　正テイ秀シュウ
 ああやあらあらあ　　鐘ショウはならず　　嵐ラン蘭ラン

一鳥不鳴山更幽

物モノの音はならず　　葉エフはならず　　元ゲン兆テウ
 ししつしつし　　拍パツはならず　　曾ソウ良リョウ
 旅リョ枕シヤク庵アンのつまな　　軒ケンはならず　　子コ里リ
 鳩トビや流杯ハイのあの蕎麦麦白ハク　　环カン碩ダク
 上ウエはならず　　鐘ショウはならず　　凡マン兆テウ
 鑿ソク釣テウはならず　　半ハン残ダク
 わわらわらわ　　向キョウのす　　尚ナカ白ハク
 柔ユウを切る跡はならず　　其ソノ角カク

さきよに鷗の羽目ぞさらさら カニ 珠碩

よのひのやもいづれか輪の秋 土芳

稲うら母よ出逢ぬいあは 元兆

自題落柿舎

梅のちや梅のちもあはれ 去来

志の原かけうら橋のしるえ 賀易小松 塵生

肌とし竹切のすみえ 元兆

神田みよ

またいづらうららの梅も梅のち

神田みよの歌うら音 数足

梅のちとあはれ

花すも大なるをまうら 嵐雪

し秋の四五日弱す 文州

まきし秋の夕や月 元兆

世の中ハ鶴鶴の屋乃 同

塔奥代齒よ 荷分

猿蓑集卷之四

春

梅咲て人の怒乃悔もあり

露沾

上臈の山莊より

候し

梅を春や山路稱入ん

去来

加賀

しん香や入粟の牛の角

白空

庭真

梅の香や山利し流す谷真

土芳

うつ蝶を由身やまよふ梅のみ 膳所 半残

梅の香や酒のこぼれあはれ 膳所 蟬角

しずくの木やけし筋を路のたし 其角

子良銀のほよ梅もよみ

伊子良子れしとて梅のふ 色蕉

瘦女敷や作りたつ我の軒の梅 千那

灰捨て白梅しむし垣糸のれ 膳所 元兆

日當りし梅吹さらや屑半房 支幽

暗香浮動月黄昏

へ相の梅よけり色しりき 風麦

武江よやとむしと環亭の 後亭

寝るし 乙羽

辛末の〜〜〜
つ〜〜〜
の〜〜〜
尚窓の〜〜
栗田若と〜
事れや〜
し〜〜
し〜〜

よきし〜あつてねるけ
あつて人の風情をさすうや

夢さつて又二句しや月ほつ物 嵐蘭
百八の〜てまらや闇のしめ 其角
ひら寝も能宿さ〜んお子目 去来
野田や序巻の〜く摘らる来 史邦
〜つ甲やちふ漕まらるる来 嵐蘭
正月月あよる〜のやめとらゆて 如行

憶翁之客中

裾たてて草をまつ〜志〜ん草枕 嵐雪
つと〜〜踏身か〜も〜ああ 路通
七種や跡よ〜〜朝〜らす 其角
家や〜を〜の〜根芥 丈艸
うす〜の〜の〜の〜 其角
膝〜を〜ら〜た〜月〜あ〜れ 同
鐘〜も〜あ〜れ〜の〜あ〜れ 去来
鶯のち〜踏〜あ〜す〜垣〜穂〜の〜れ 一桐

伊賀

雪下し冬一みりたきりふ

江戸 溪石

うらふやを道あつれし

其角

鶯や下駄の歯よつく小田代上

凡兆

雪や宮よ冬ちよとんあ

伊賀 魚日

やぬのちを新らひす

探元

け溜はきよめ持へき柳

江戸 ト宅

垣うにさへてしれ下柳

同 遠水

もこい 極変れよ柳

尚白

青柳のちもたや鯉の住所

伊賀 一噴

雪のけや鈴いす場乃す

同 木六

待中乃正月もいや

揚水

田代よとて

雪やにやのちを橋の妻

芭蕉

うらやまのけをい切崎橋の意

越人

うきなよのけを新らひす

去来

飛路法公とて餘寒の當座

鳥の羽はさしめぬ羽織の 亀翁

おのゝあはれちりしはむすし白の 尚白

おらりも極よあはれしむすし白の 龜翁

そはち知くくは物あはれは 嵐雪

骨紫のあはれあはれもあはれは 凡兆

白鳥や海言はり鳥のい合をせ 其角

人のあはれあはれあはれは下橋酒造 松峯

よきあはれあはれあはれは 元志

陽炎や取しむすし白のい合をせ 荷方

おけはあはれあはれあはれは 百歳

うけりよあはれあはれは岸のあ 赤方

いとあはれあはれあはれは 氷固

新ふるよあはれあはれは 凡兆

ふけはあはれあはれあはれは 芭蕉

いとあはれあはれあはれは 配力

狗脊の塵よあはれあはれは 嵐雪

表上

表上

彼岸まへとしまる一夜におも 路通

ふのしやや中つたありとて涅槃像 野水

三花並ぬ裏ハ燕乃かろい道 九兆

ささうく今や紀のへしこめの尾 伊賀 沢雉

春のぬや厚のの小草ふと即ちぬ 嵐虎

ふしよみよし

よきもやふり出るるそと法門 猿錐

不性と金かき起しけりまある 芭蕉

春のぬ下田の養のしとれ終る 史邦

しつとみのあもや軒よあむ 羽紅

泥を吐や田代水の壁つとん 史邦

蜂こころの本を舞の竹や思の囊 昌房

振るふや下をよむとまると年を離 去来

よるのよこすれ能の写るのふ 伊賀 萩子

桃御くらりありとやをんるれ子 羽紅

ふくれま境のふとぬきと 鳥巢

里人の暗屋しるも田畑の如 嵐推

蝶のまじりて一と夜を待よなり有雲のほ 半残

帝鷹切て白根、嶽主の虫の 桃妖

いのたよりいづもすしや潦 園風

月の影やこそくれよの親すめ 珠碩

石の鼓むむ其のすまや縁のえ 土芳

園の夜や葉なまらうとてあゝ衝 芭蕉

越らり飛深くめとて露の
ついでにおもひをさしめしる

きこふは海し
こもるは山

鴉鳥の葉の樟の枯枝よ目みぬ 久兆

うすくはらりてんをさすやみ 石に

子や初ん餘りきくたのさあゆ 秋風

いしりあゝ中れ拍子や雉まのや 芭蕉

芭蕉菴のふらふら

蓮草小鋸はくあもやこれ 曲水

木白筋旅しとるくおらあゆ 山店

畫譜

山吹や夕涼の焙炉は匂ふ時

芭蕉

白玉の冴あまきつづく枝りれ

車来

あちぢれの髪けりつらんもあ
らうととけよち
うらやまのこころ

わか 箒もろくそ昔やちらり枝

羽紅

鵜半おしよとつらふもい

坂上氏

うらやまの笠はらうらうら

芭蕉

しらとらうらうら

伊賀 利雪

東叡いよあうぬ

小坊まや雪あふりしとらう

其角

一枝のゆあはらうらうら

尚白

雛のあはもきつゆのやま枝

凡兆

まきえうらうら 枝あらんちる枝

丈艸

馬月のうらうら 雪んくはせさうら

史邦

あやみようらうら 雪んくはせさうら

千那

高城のぬきこまふり

ねんふりまよぬけ并の顔
色意

いの國花垣のなはりのつら
まはらうハ字福代神よ酔
らまじと云傳へんらん色
れし

一里のれ花守の子孫く下
同

この文の墓東武谷中にありて
三歳とありぬれ九年のほみ
説くところぬ墓のあり極極
ゆるりかゆく母姑ゆりこと
つらうこれ極をたつは極
他の墓にともくはるれは

まうやぶるぬよ野の往還
園風

知人よあしとありんれ
去来

あつ僧の嬉りまのたれ
凡北

浪人のやうく

嵐を吾の夜あれう花
半残

野まこくれま中絶ゆへ
長眉

これの奥もや
この巨海くみ

大券やうく奥乃あのみ
曾良

道灌山よのけしき

る清やまきさうのびをひかゆ 嵐蘭

源氏の強きかへり

探子に夜ちるまれさすし 羽紅

庚午の歳家を焼く

綾よりりしきさる花はらりし 北枝

しれりや伽藍の櫃やし 凡兆

海棠のしきと満より夜のみ 普船

大和の脚乃しき

草臥くちるはやあのみま 芭蕉

山や躑躅ふけは尾のひり 探丸

やうく海よりんまや白紙 智月

兔角して卯まつるし猿や 山川

鷺鳥のひさしうりてよりとあれ 式之

木曾塚

具志の石いもなきはまあれたる 乙羽

春風吹花去
如柳絮之堂然
曾良

望湖水惜春

好春也
色蕉

